

世の親達よ、もっと子供と接する機会をこしらえたらどうだろうか？

子供から親を見る目、親から子供を見る目もそこから生まれて来るのでは。私の考え方が古いと言われればそれまでだが、長いようで短い、短いようで長い人生、いつの時代でも親と子の繋がり、人と人、人と物との絆をより深いものにする事ができたら、どんなに素晴らしい事だろう。

姪の結婚にあてて

初めし日を老いて語れる仲間なれや

喜び嬉し松の育てよ

※栗に柿 みかんになしの 日本晴れ



30年ぶりの再会

— 沖縄からの疎開者たちと —

千草 鎌田 巖

会誌「庄内」10号に亡母ナミの手記「沖縄の疎開者たち」のことを書きましたが、その後のこの疎開者たちとの暖かいかわりについて母の手記を転記します。(現文を一部加除修正)

「一九七五年(昭和50年)八月、私は長崎の新日本婦人会発行の原爆文集「きのこ雲」の編集を終えて11日に宮崎から帰って来ました。

留守の間に沖縄から電話があったそうです。

それは晴義(三男)の同級生だった沖縄の又吉真昌さんから、30年ぶりの電話で晴義に「海洋博」に是非来てくれ、出来るだけのことはするからとのことだったそうです。

電話は矢野ミスミ様(故人)に受けていただき、晴義は去年一月に亡くなったと伝へたところ、真昌さんは驚きのあまり声もふるえ、生前のことなど話しながら涙されたそうです。

招待のお礼を述べ、ちようど学(長男)夫妻が簡易保険の団

体旅行で海洋博見学に行く予定なのでよろしく頼むと手紙に書き、晴義の追悼文集「悲しみを越えて」と「きのご雲」を同封しました。

折返して真昌様からの返信が届きました。

「……30年前、晴義君と一緒に毎日学校へ通った又吉真昌です。10月17日、お手紙と同封の追悼文集を読み妻も私も涙が止まりませんでした。

母ウシの話によると鎌田さんは当時婦人会長をしておられ、本当にお世話になったとのこと、「きのご雲」を読んで認識を新たにしました。

鎌田さんが戦中、戦後現在に至るまで私たちの事に関心をよせ愛情をそそいでいただいていること知り、なおいつそお逢いしたくてなりません。心よりお待ちしております。」と結んでありました。

そこで長男学からも、せきたてられて12月沖繩行きを決心しました。

12月5日、定夫（次男）と二人、鹿児島を発ち、沖繩空港に着きました。

白い大きなさらしに、墨で大きく「歓迎、鎌田ナミ、定夫様」と書いたのぼりを持って出迎えて下さいました。

出口の所では又吉ウシさん（真忠さんの母）、比嘉ウサさん、又吉ウシさん（真昌さんの母）の三人と抱きあって30年振りの再開を涙を流して喜んだものです。

それから、真忠さん、真助さん兄弟、真昌さん、正吉さん、春徳さんほかたくさんの方たちと三台の愛用車に便乗して南部戦跡めぐり、姫百合の塔、玉泉洞見学……と皆様に手を引かれ、抱きかかえられるようにして廻りました。

その夜は真忠さん宅で歓迎会がありました。

30年前の皆様が一人も欠けず集まっていただき疎開当時の苦労話や思い出、沖繩へ帰ってからの話に花が咲きました。

疎開当時小さかった少年少女の立派な成長の姿、結婚、お孫さんの誕生、あの夏が嘘のように平和な楽しい夜でした。

翌六日は、海洋博見学、本家の真忠さん宅に皆集まり棚原（現在は安里姓）カマトさんも一緒に三台の車で出かけました。

途中、写真を撮ったりしながら会場に着くと、高い鉄橋を渡るのも皆様から手を引かれて団体客でござったかえす中をたくさん美しい噴水を見ながら入場しました。

会場では「お母さんはこちらへ」と手押車に乗せられ、働き盛りの皆さんが交替で押ししていただき説明を聞きながら見物して廻りました。

いつまでも変わらない皆さんのご愛情に私の心の中にはしきりに何かがかみ上げてくるのでした。

昼食は、朝早かったのでいつ用意されたかと思うほど色々なご馳走をいっぱい頂きました。

七日朝、真昌さん宅で記念写真を撮って出発、浦添、那覇地区の街並を通り、戦跡も一つ残らず訪れ、惨めな戦いに死んでいった霊を心からなぐさめました。

疎開地の千草から引揚げたときの沖縄は、すさまじい戦場のままで木は無残に吹き倒され、水の流れは変り、わが家はもちろん灰になり屋敷あともさっぱりわからなかったそうですが、今ではすっかり復興している姿に安堵しました。

空港ではみなさんが揃って待っておられ「おかあさん、また来てね」とひとり一人握手しながら再会を約束しました。

小雨の中、二十人余りの方たちが子供さんやお孫さんともどもお見送り下さり、私達も涙を流しながら訣れのハンカチを振りました。

姿が見えなくなるにつれて自分にもどり「皆さん、本当にありがとう。いつまでもお元気で……」と合掌しました。

